

(論文の要旨)

論理的認識力を高めるための説明的文章の読みに関する 小学校国語科スパイラルカリキュラムの開発

広島大学大学院 教育学研究科 博士課程後期
学習開発専攻 カリキュラム開発分野

青山 之典

2015

1. 研究の目的

先行研究によれば、説明的文章の読みの指導を行うとき「論理」および「論理的思考」が重視されるが、「論理」および「論理的思考」の概念規定は混乱している。そのため、育てるべき能力の概念規定も揺らいでいる現状がある。また、説明的文章の読みの指導を進めるためのカリキュラムの構造には系統性に問題があることが指摘されている。このような説明的文章の読みの指導をめぐる問題は、いまだ解決されていない。本研究では、これらの問題を解決するため以下の3点を目的とした。

- ① 論理・論理的思考に関する先行研究および概念整理論考の成果を批判的に継承した上で、論理的認識力の設定の必要性を述べ、その概念規定を行う。
- ② 学習指導要領のもつ「要素積み上げ方式」のカリキュラム構造の問題を明らかにするとともに、諸外国の読解能力育成のためのスパイラルカリキュラムの構造を検討し、構造的特徴を明らかにし、その可能性を検討する。その上で、論理的認識力育成のためのスパイラルカリキュラムを構成するための要点を明らかにして、学年目標および教材選定のあり方について検討する。
- ③ ①と②の成果をもとにして、論理的認識力を高めるための説明的文章の読みに関するスパイラルカリキュラム（小学校1学年～6学年）を構築することを目指す。具体的には、学年目標および指導目標に沿った教材を選定して、論理的認識力を高めるスパイラルカリキュラムを構築する。

2. 研究の方法

研究の目的を達成するため、次のような方法で研究を進めることにした。

まず目的①を達成するために、日常的推論に関する認知心理学の研究成果から「日常の論理の偏向」について明らかにし、それが認識の限界を生じさせる一つの要因であることを示した。その上で、これまでの論理・論理的思考に関する概念規定の問題点を明らかにして、認識の限界を克服するための能力の構造を明らかにした。

次に目的②を達成するために、学習指導要領の構造を検討して問題点を明らかにし、カナダおよびアメリカ合衆国において運用されているスパイラルカリキュラムの構造と比較して、スパイラルカリキュラムの可能性について検討した。その結果をふまえて、説明的文章の読みに焦点をあてたスパイラルカリキュラム構成の要点をつかむために、現行国語科教科書を分析するとともに、カナダにおける授業と教師の一事例を分析し、まとめた。

さらに、目的③を達成するために、ここまでの研究の成果を踏まえ、スパイラルカリキュラムの構成原理について示した上で、論理的認識力を高めるスパイラルカリキュラムを構築した。

論文の構成は次の通りである。

序章	研究の目的と方法
第1章	問題の設定—日常の論理の偏向をどう教育で扱うか—
第2章	論理的認識力の設定
第1節	論理・論理的思考力の再構築
第2節	「論理」と「意味内容」との相互補完について
第3節	コンテキスト分析能力について
第4節	論理的認識力の設定
第3章	諸外国の読解カリキュラムの検討

第1節	読解カリキュラムの検討1—カナダ・オンタリオ州の場合—
第2節	読解カリキュラムの検討2—アメリカ合衆国の場合—
第3節	Strand概念の導入による改善の可能性
第4章	論理的認識力を高めるためのカリキュラム編成の枠組み
第1節	論理的認識力からみた小学校国語科教科書の教材分析
第2節	トロント大学附属学校の授業と教師の分析
第3節	カリキュラム編成の枠組み
第5章	論理的認識力を高めるスパイラルカリキュラムの構築
第1節	論理的認識力を高めるスパイラルカリキュラムの哲学
第2節	カリキュラム編成の実際
第3節	教材選定の実際
第4節	カリキュラム構築の成果と課題
終章	研究の成果と課題

3. 論文の概要

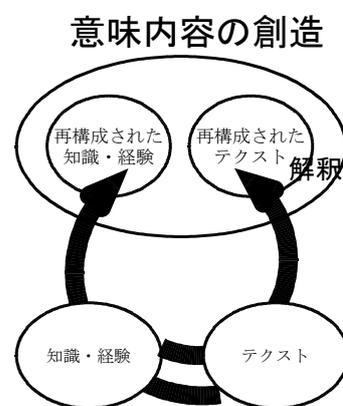
第1章では問題の設定を行っている。日常的な推論は知識依存の状態にあり、形式論理の枠組みだけで妥当な推論を行うことは困難である。このような日常の論理の偏向に対応する能力の育成については、情報の真偽性・妥当性・適合性に関する指導の必要性が主張されてきた。しかし、その反面、意味内容に関する下位能力を位置づけるために論理的思考力の概念規定は広義のものとなり、指導目標や指導内容の構造化が難しい状況を生み出している。本章では、論理を狭義のものとして概念規定し、周辺概念とともに再構造化することの必要性について論じている。

また、認知心理学の知見から論理をめぐる意味内容の創造過程は、表現主体の背景に影響を受けた場合に偏向する傾向が高く、そのために生じる認識の限界を克服するために本章では、表現主体の背景に注目することが必要であることも論じている。

第2章では、論理的認識力の設定を行っている。(図1および図2参照)

第1節では、論理的認識力の下位能力の一つとして論理構築能力を設定した。論理を因果関係に絞った狭義のものとして概念規定し、論理と周辺概念との再構造化を図っている。具体的には、因果関係に絞った狭義の論理的思考力をマクロ構造における論理に対応する能力であると考え、メゾ構造、ミクロ構造における結束性に対応する能力を小さな因果関係を含む関係性一般に対応する能力であると捉えた。

第2節では、論理的認識力の下位能力の一つとして、意味内容形成能力を設定した。それが論理構築能力と往還的かつ相互補完的な関係をもつことで、認識の限界を克服することを実践的に明らかにしている。読者はさまざまな知識や経験を有し、テキストを理解する場合にそれらと関係づけて解釈することで深い理解を実現する。さらに、そのような深い理解は、読者の知識や経験に働きかけ、知識の組み替えや経験の捉え直しを実現し、欲動を引き起こす場合もある。このような深い理解までを含んで、「意味内容の創造」という概念を規定した(図1参照)。また、説明的文章の読解の場合、テキストを解釈するためには知識・経験を引き出すだけでは十分でなく、論理構築能力を使って、自らの知識

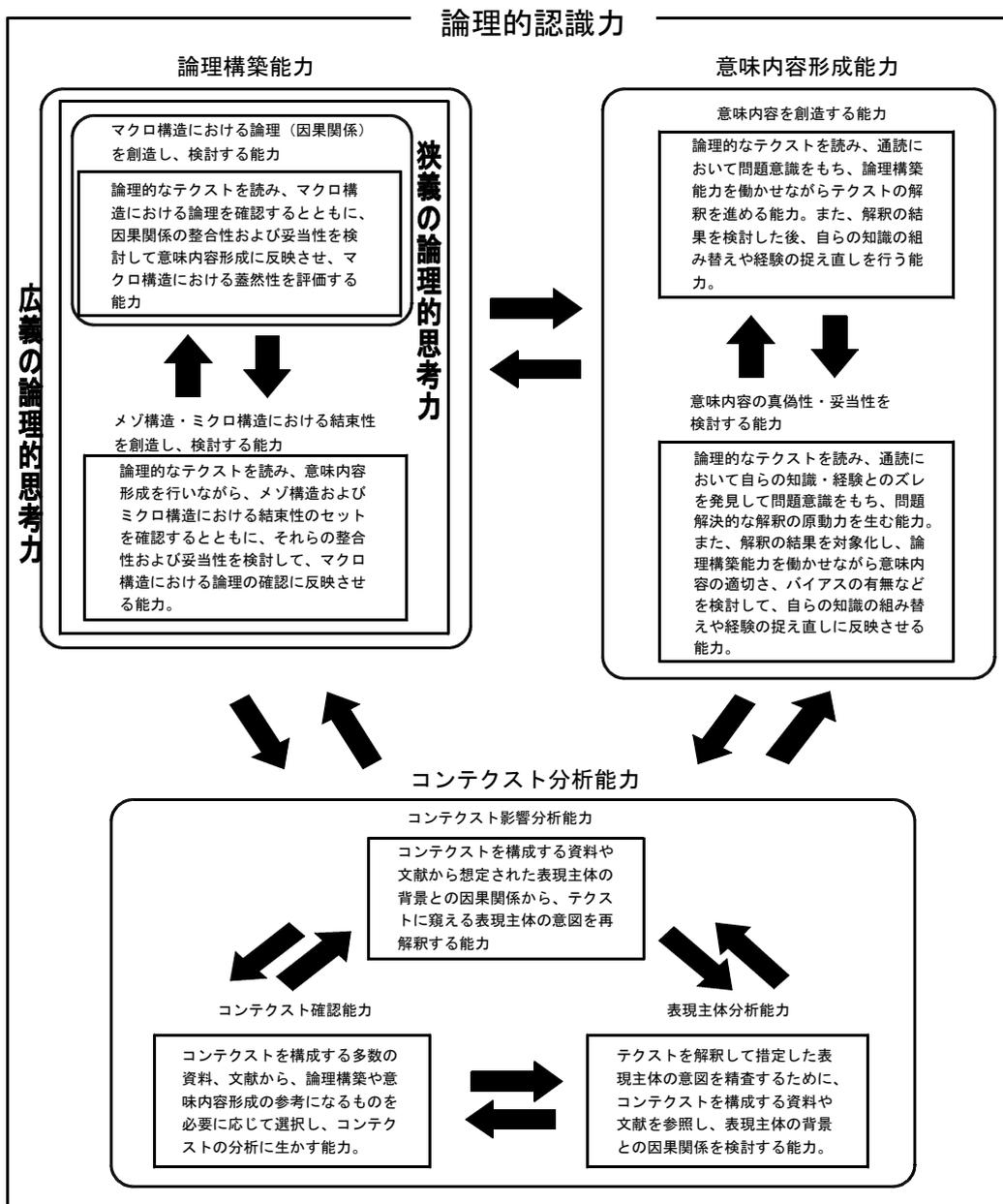


【図1 意味内容の創造】

・経験からだけでは推論できない意味内容を創造する必要があることも明らかにした。

第3節では、論理的認識力の下位能力の一つとして、コンテキスト分析能力を設定した。コンテキストを意識せずに読むことは、認識の限界を生じさせる原因になると考えられる。本研究の立場は、間テクスト性に立脚しており、コンテキストを分析しテキストの読みに反映させることで、本質的なテキストの読みを実現することを目指している。また、教材のコンテキストを分析し、テキストの読みに反映させるためには、教師と研究者との分業が必要であること、具体的には表現主体の背景をとらえるための資料を研究者が作成することの必要性を論じ、作成した資料を使って、どのような授業が構想できるのかについても、具体的に提案している。

第4節では、論理的認識力の設定を行っている。第1節から第3節までの考察をもとに、論理的認識力を構造化し、読む行為の基底で働く論理的認識力の概念規定を行い、その構造図を示している。(図2参照)



広義の論理的思考力

コンテキスト分析能力

コンテキスト影響分析能力

コンテキストを構成する資料や文献から想定された表現主体の背景との因果関係から、テキストに窺える表現主体の意図を再解釈する能力

↙ ↘

コンテキスト確認能力

コンテキストを構成する多数の資料、文献から、論理構築や意味内容形成の参考になるものを必要に応じて選択し、コンテキストの分析に生かす能力。

表現主体分析能力

テキストを解釈して指定した表現主体の意図を精査するために、コンテキストを構成する資料や文献を参照し、表現主体の背景との因果関係を検討する能力。

【図2 論理的認識力の構造】

第3章では、諸外国の読解カリキュラムの検討を行っている。

第1節では、カナダ・オンタリオ州の読解カリキュラムと学習指導要領を比較している。カ

ナダ・オンタリオ州のカリキュラムはスパイラル型であり、Strand 概念を適用した系統的な目標群によって構成されている。それは「要素積み上げ方式」で構成された学習指導要領では見られない構造であると捉え、学習指導要領の構造的問題を改善する可能性を論じている。

第 2 節では、アメリカ合衆国の読解カリキュラムに焦点をあてている。カナダ・オンタリオ州と同様にスパイラル型のカリキュラムであり、Strand 概念を適用した系統的な目標群によって構成されている。森田 (2002) は 1935 年に出された *An Experience Curriculum in English* を分析し、同じ能力を範囲と難度を高めながら繰り返す構造に Strand の存在を指摘しているが、異なる哲学をもつ現在のカリキュラムにもその設計思想は受け継がれていることを明らかにしている。

第 3 節では、Strand 概念の導入による読解カリキュラム改善の可能性を考察している。小田 (1986) の指摘にもあるように、小学校中学年段階での要点把握、要点相互の関係把握・中心点把握の指導は理解力育成上のターニングポイントとなっているが、これは単に中学年における指導上の問題に帰結できない構造的な問題を含んでいると考えられる。そこで、要点・要旨把握指導に焦点をあて、学習指導要領 (小学校～高等学校) の系統性について検討を加え、アメリカ合衆国のカリキュラムにおける要点・要旨把握指導の目標群との比較を行い、Strand 概念の導入による読解カリキュラム改善の可能性について論じている。

第 4 章では、カリキュラム編成の枠組みについて明らかにしている。

第 1 節では、第 2 章において考察した論理的認識力の下位能力の系統を明らかにするために、小学校国語教科書の教材分析を行った。そして、論理構築能力、意味内容形成能力、コンテクスト分析能力を育成するための指導の系統はどのようにあるべきかを論じている。

第 2 節では、カリキュラム運用の側面から、カリキュラム編成の在り方を論じている。カナダ・オンタリオ州においてリーダー的存在のトロント大学附属学校の教師および授業を分析し、教師の主体性を尊重できるカリキュラムのあり方について検討している。

第 3 節では、第 1 節と第 2 節での考察をまとめ、カリキュラム編成の枠組みについて論じている。カリキュラム編成の哲学の重要性、様々な水準の目標設定、論理的認識力の下位能力に対応する目標設定など、カリキュラム編成にあたって枠組みとなるものを取りあげ、検討している。

第 5 章では論理的認識力を高めるスパイラルカリキュラムを実際に構築している。

第 1 節では、論理的認識力を高めることの意義について論じ、カリキュラムの哲学を示している。第 2 節では、第 4 章で作成したカリキュラム編成の枠組みに沿い、これまでの実践経験を振り返って、児童の発達の実態に合うようなカリキュラム編成を行った。下位能力ごとに Strand を設定し、その Strand を貫く目標、学年目標について示している。

第 3 節では、論理的認識力育成の視点から教科書教材の分析を行うとともに、学年目標を具体化する教材の選定を行うとともに教材選定の理由を示している。

第 4 節では、カリキュラム構築を振り返り、その成果と課題について述べている。

4. 本研究の意義と成果

本研究の意義は次の 3 点である。

- 認識の限界を克服するための論理的認識力の概念規定を明らかにした。
- 学習指導要領の構造上の問題を克服するための理論を構築した。
- 論理的認識力を高めるためのスパイラルカリキュラムを構築した。

具体的には、成果として次のような点が挙げられる。

第 1 に、論理・論理的思考力の概念整理がもたらした成果について、日常の論理の偏向という

視点から検討し、その限界を明らかにするとともに、その限界を克服するための方向性を明らかにした。論理的認識力を設定し、その下位能力の一つとして狭義の論理的思考力を位置づけ、こぼれ落ちる能力群を構造化して下位能力として位置づけるという発想で構造化を進めることの必要性を論じた。

第2に、論理的認識力を論理構築能力、意味内容形成能力、コンテキスト分析能力という3つの下位能力をもつ能力として概念規定した。そして、これら3つの能力を往還的かつ相互補完的に機能させることで論理的認識力が機能する実相を、実践的に明らかにした。

第3に、カナダ・オンタリオ州およびアメリカ合衆国の読解カリキュラムを比較の対象とし、学習指導要領の構造的な問題として指摘されている「要素積み上げ型」の実態について明らかにし、スパイラル型のカリキュラムの構造について検討した。その過程で、Strand という基本構造の重要性および、Strand 相互の有機的な関係を成立させることが重要であることを明らかにした。また、考察の過程では、アメリカ合衆国のカリキュラムの全文和訳を行った。さらに、カナダ・オンタリオ州のカリキュラムからは Cueing System の重要性を確認した。

第4に、論理的認識力を高めるためのカリキュラム編成の枠組みについて考察した。具体的には、小学校国語教科書の教材について分析を進め、論理的認識能力の下位能力である論理構築能力、意味内容形成能力、コンテキスト分析能力それぞれの指導の系統について考察を進めた。その結果、論理の型についての系統を明らかにし、基本的な結束性の種類を明らかにして、教材選定の手がかりを得た。さらに、下位能力育成のための目標の系統について明らかにした。そして、トロント大学附属学校の教師の分析および、授業の分析を行い、カリキュラム編成にあたっては、教育哲学を明示することが重要であること、教師の主体性を保障するためにあまりにも詳細な内容を示さないことの必要性などを明らかにした。

第5に、論理的認識力を高めるスパイラルカリキュラムを編成した。具体的には、論理的認識力育成の意義、論理的認識力の構造図、論理的認識力を高めていくためのカリキュラム編成のあり方、カリキュラム運用のあり方について明示した後、カリキュラムを編成した。論理的認識力育成のための Strand は7本設定し、総括目標、それぞれの Strand を貫く目標、それぞれの Strand の学年目標をカリキュラムに明示し、そのための教材を選定した。第4章までの考察をもとに、同じ学年目標相互が往還的かつ相互補完的に関係付けられるように工夫をしながら、かつ上下の学年目標相互の系統性も考慮して目標の設定を行った。また、教材についても、範囲と難度を少しずつ高めていくことができるように選定した。

本研究において残された課題は、実践による検証とカリキュラムの再構築である。今後、実践研究者との共同研究をとおして地道に進めていきたい。

【主な引用参考文献】

- P.N.ジョンソン＝レアード（1988）『メンタルモデル—言語・推論・意識の認知科学—』産業図書
ジュリア・クリステヴァ（1969）『セメイオチケ2』せりか書房
井上尚美（1977）『言語論理教育への道』文化開発社
西郷竹彦（2005）『〈文芸研〉新国語教育事典』明治図書
難波博孝（2008）『母語教育という思想』世界思想社
波多野完治、吉田昇、木原茂編（1974）『現代の国語教育理論 認識と学力の統一』三省堂
間瀬茂夫（2001）「間テキスト性に注目した説明的文章の学習指導論の構想」『国語教育論叢』
第11号、島根大学教育学部国文学会、pp.15-27
森田信義（2011）『「評価読み」による説明的文章の教育』溪水社